



M.M.Honcho Newsletter

【5月号】令和8年5月1日発行

▼WEB PAGE



▼e-mail



「深い学び」とは

副校長 森 圭一郎

風薫る5月になりました。新年度が始まり約1か月。子どもたちは新しい学年の学習や活動に張り切って取り組んでいるところです。新たな環境に慣れていくためご家庭でも様々ご協力いただいた点があるかと思いません。ありがとうございます。

4月より、副校長として着任しました森圭一郎です。どうぞよろしくお願ひいたします。

さて、現在、文部科学省の諮問機関では今年度末に策定される予定の次期学習指導要領の内容について、議論されています。

検討の基盤となる考え方として次のものが示されています。

- ①「主体的・対話的で深い学び」の実装
- ②多様性の包摂
- ③実現可能性の確保

—多様な子供たちの「深い学び」を確かなものに—

「文部科学省 教育課程企画特別部会 論点整理」

(令和7年9月25日)より抜粋

ここで出てくる「深い学び」とはどのような学びを指すのかについて、私は昨年度まで教育委員会事務局で、これからの学校教育の在り方についての研究や発信をしていく部署におりましたので部署内で議論してきました。

そんな中、思い浮かぶ子どもの姿がありません。

もう10年ほど前になりますが、当時5年生の担任だった私の学級の子どもの話です。社会科の学習では、我が国の産業に携わる人々の営みから日本の産業の特徴や抱える課題、これからの在り方について考えます。

そのときは日本の農業を学習する際に山形県の米作り農家の方を取り上げました。その方は、手間や費用が掛かっても堆肥を作り、田の土作りに力を入れている方でした。

また次の水産業の学習では東京湾でアナゴ漁をしている漁師の方を取り上げました。その方は、アナゴをとる筒の水を抜く穴を広

げ、小さなアナゴを逃がす取り組みをしている方でした。

その水産業の学習中に、ある子どもがノートにこんなことを書いていました。

米作りとアナゴ漁は似ている。どちらも手間を掛けなくても今はそこそことれるからいいのに、手間をかけているのは、将来のことを考えているからではないか。堆肥を使わなくても今はとれるけど、そのうち土が固くなってとれなくなる。アナゴの筒の水抜き穴は大きくしなくてもとれるけど、そのまま取り続けていたら将来アナゴがいなくなってしまうかもしれない。だからどちらも今、工夫して苦労してこれからも続けていけるようにしているんだ。

私ははっとしました。当時の私にこの二つの学習を関連付けて考えてはなかったのです。しかし、その子どもは二つの事象を関連付け、持続可能な産業の在り方について考えを深めていたのです。

ただ単に米作りの作業やアナゴ漁のやり方を理解し、私たちとのつながりを考えるだけでなく、その営みから未来を見据え今何をするのかについて考え取り組むことの意義について考える、その姿こそ、深い学びといえるのではないかと思います。

言い換えると学習がその学習だけでとどまるのではなく、他の学習や生活、未来につながる汎用的な理解や考え方を身に付けること、それが深い学びなのではないかと考えています。

本校の職員も、子どもたちの学びがより深い学びとなるよう日々研究、議論しています。未来を見据え、激動の社会の中で活躍できる人を育てるため、これからも子ども理解、授業づくりについて考えながら、職員一丸となって取り組んでまいります。ご家庭のご理解、ご協力をお願いいたします。